

第 3 6 回原産年次大会開催の概要

平成 1 5 年 5 月 1 3 日
(社) 日本原子力産業会議

第 3 6 回原産年次大会 (基調テーマ : 「 国民の理解を求めて 原子力のさらなる発展のために 」) は福井県知事からの要請を受け、わが国における枢要な原子力立地県である福井県で開催した。

期間は 4 月 1 4 日 (月) から 1 7 日 (木) の 4 日間で、うち 1 日をテクニカルツアー、1 日を敦賀大会、2 日間を福井大会とした (別添プログラム参照)。

市民を含め 1 , 3 0 0 名余り (うち海外参加者約 1 0 0 名) の参加があり、セッションのほか様々なイベントがプログラムに盛り込まれた、地元原子力関係 4 機関の積極的な協力もあり、大会は成功裏に終了した。

地元関係者との連携、一般市民との交流が進んだ

- ・ 大会のねらいのひとつである身近な大会を目指す観点から、専門家以外の人も含め地元関係者がパネリストとなり、県内の原子力施設や原子力技術と一般市民との関わりをあらためて紹介するとともに、地域の発展や社会全般の理解について討論を行った。
- ・ 敦賀市で開催された「市民の意見交換の夕べ」と福井市での「市民からの質問に答える会」では、原子力発電所の不正記録問題に絡んでの情報のありかた、敦賀 3、4 号機の増設計画の遅延理由、テロなど防災計画、エネルギー源別の経済比較など質問や意見・提案がなされ、率直な討論が進められた。
- ・ 地域発展については、「身近な原子力を福井県から考えてみよう」のセッションで、地元企業支援制度の成功例、放射線を利用した改良技術などが紹介され、立地地域の人たちの関心や疑問に応える機会となった。
- ・ 原子力・エネルギーの広報活動を進める地元の女性グループがプログラムに参加し、日頃の活動を披露、積極的に P R してもらう機会を設け、「関西原子力懇談会女性広報アドバイザーの会」が「若狭おばちゃん劇場」を上演、また「福井県女性エネの会」のメンバーが手作りの紙芝居を紹介した。
- ・ 大会関係行事として欧州原子力学会のリーシング副会長が福井市立藤島中学校を訪問し、中学 3 年生約 1 5 0 人生徒に対して自らの体験等をふまえ原子力・エネルギーなどについて分かりやすく講義を実施した。同氏はスウェーデンで原子力がどのように受け入れられてきたかを紹介し、また、自らの経験を通し、原子力や放射線関係の仕事の中で多くの女性が活躍していることを話し、これから進路を選んでいく中学生に対し、夢を実現して欲しいとのメッセージを送った。さらに大会期間中に県内中学校教師と原子力関係者の懇談会を開催し、エネルギー・原子力と学校教育をめぐり、“自分の郷

土を良く知る”ことを原点としてとらえ、望ましい学習環境や学習内容について率直な意見交換を行った。教育現場からの原子力やエネルギーに関する教材、実験器具の不足といった課題や専門家の協力などの要望が示されたのに対して、原子力関係者は支援体制を整えて、学校関係者との関係を深め要望に積極的に取り組みたいとの姿勢が示され、今後ともこのような意見交換の場を設け協力していくことが確認された。

- ・今大会では、4コースのテクニカルツアーを実施し、大会参加者が多数参加した。福井県内の原子力開発利用の現場に触れるとともに、福井県各地の文化・産業を知る機会を提供できた。また、レセプションの場でも気比太鼓や琴の演奏、「若狭路博2003」を紹介、敦賀・福井の物産展も併催するなど、地元の産業・文化を全国から集った参加者に知ってもらう機会とした。
- ・上記のように、短い大会期間中にセッション以外に沢山のイベントなどを織り込んだため一部参加者数の偏りがあり、参加者から改善の意見が寄せられた。今後のプログラムの編成に一考を要する点である。

福井県内のメディアも大きく報道、多くの県民に情報を発信

- ・今大会は、メディア関係者としてはここ数年で最多の31社、63名が参加した。（一昨年22社・48名、昨年22社・41名）
- ・県内メディア（新聞、テレビ局）も、今大会を大きく取り上げた。有力紙の福井新聞は、大会初日の15日にあわせ8面の原子力企画記事を掲載。年次大会の紹介のほか、県内の原子力施設の現状や研究開発での取り組みを紹介し、広く県民の注目を集めた。報道内容も客観的であり、かつ大会の意義を理解したものであった。

「もんじゅ」の運転再開をアピール

今年1月に名古屋高等裁判所金沢支部において「もんじゅ」に係わる設置許可無効の控訴審判決が出され、国民、県民の間に大きな動揺、不安が広がるなか、大会ではまず、原産会長より今回の司法の判断は遺憾ではあるが、この問題を早く解決させたいとの表明がなされるとともに、経済産業省原子力安全・保安院よりこの判決に対する上告の理由が明確に説明され、さらに、文部科学省、経済産業省、内閣府の代表者、さらには、藤家原子力委員長からも特別講演「我が国の核燃料サイクル政策」において、基本政策に基づく3段階の現実的方策が明らかにされ、その中で高速増殖原型炉「もんじゅ」の運転再開がきわめて重要であるとの考えが表明された。また、文部科学省、経済産業省の幹部は、大会での発表後、敦賀市長を訪問し、国として「もんじゅ」の地元説明会を開催する意向を説明した。このことは、地元の新聞を中心にマスコミで大きく報道された。

プルサーマルの推進を明確に打ち出した

プレナリーセッション「プルトニウム利用の意義を再確認する」では、まず米国が先進核燃料サイクル・イニシアチブの検討状況を紹介、フランスは2040年頃までを見通した3段階のプルトニウム・リサイクル計画を発表し、ロシアの再処理・リサイクル計画も相まって、それぞれの国においてウラン燃料の有効利用と環境負荷の低減の観点から、プルトニウム利用の必要性が強調されるとともに、人類全体や地球規模の視点からその重要性が訴えられた。また、国内からも文部科学省、経済産業省、内閣府の代表から、プルサーマル推進の重要性と期待が相次いで表明された。なお、大会2日目にあたる16日には、関西電力が福井県に対し、「2007年実施に向けて年度内のMOX燃料加工契約締結」の意向を表明し、将来のプルサーマル実現に向け第一歩が踏み出された。

持続的発展に果たす原子力の役割が強調された

- ・ IAEA、フランス、中国など海外の代表による報告から、将来のエネルギーとして、地球温暖化防止、安定供給、経済性の観点から、原子力を化石燃料資源と適切に組み合わせ考えていく以外に持続的発展に貢献する方法はないことが、共通の考え方として示された。
- ・ 日本からは、甘利衆議院議員が昨年施行されたエネルギー政策基本法を紹介し、安定供給と地球環境保全を基本に据える同法の趣旨からいえば、燃料リサイクルによるウラン資源の有効利用が可能でCO₂発生量が極めて少ない原子力は非常に優れたエネルギー源であることを強調した。藤電気事業連合会会長は、今後、アジアを中心としたエネルギー消費量の飛躍的増大が世界経済と国際情勢に与える影響、化石燃料燃焼による温室効果ガス排出、さらに資源面、環境面での制約が強まることが予測される中で、低廉な電力を安定して供給するのに大きな役割を果たすのは原子力発電と明言し、将来の持続可能な発展に核燃料サイクルと相まった原子力の役割がきわめて重要であることが強調された。

原子力施設の安全にむけて改革の方向性が示された

セッション2「原子力発電所の運転管理 新たな取組」では、まず近藤議長が、原子力発電の安全について地域社会の信頼を損ねている今日の状況は規制側、事業者とも軽水炉発電の好成績に安住して、この10年間運転管理の合理化・高度化への努力を怠ってきたことに起因しており、一体となった努力の傾注とともに、安全の顧客は地域社会の人々であることを認識して、顧客満足の実現を目指す活動が充実して行われていることが常識になることが肝要だと強調した。またパネリストの原子力安全・保安院長は、現在規制ルールの明確化に取り組んでおり、維持基準は10月に導入する予定で、検

査のあり方としては抜き打ち、監査型に変えていく方針であることを明らかにした。また、同院長は規制者と非規制者の関係については自主検査を法的に位置づけ、それをしっかりと監視し、判断していくためルールを整備が必要であるが、現場には「あらゆる現実とデータ」があり、その活用をめぐって対等な立場での両者間のきちんとしたコミュニケーションが必須であると述べた。パネル討論では、政府および事業者は、つねに情報の透明性をはかる努力を継続し、説明責任を果たしていくことが、国民、住民の原子力の理解につながることであり、この努力の積み重ねが最終的には、社会が求める安心と原子力側が社会に求める納得につながるということで意見が一致した。

高レベル廃棄物処分場の選定にむけて着実な活動

フランス、スウェーデン、フィンランドなど、高レベル放射性廃棄物処分計画先進国の専門家による報告で、地層処分の安全性が立証され着実に処分場立地に向けての手続きが進められている状況が紹介された。原子力発電環境整備機構（NUMO）からは処分地選定にあたって段階的な事業展開、地域の自主性の尊重、透明性の重視を事業の３本柱として画期的な公募制を進める決意が明らかにされた。一方、スウェーデンのカーソン前オスカーシャム市長からは、処分場立地を円滑に進めるには、地元住民と規制当局・実施主体の間に、国会議員や首長など市民から長年にわたり信頼されている人による精力的な仲介プロセスが、高レベル放射性廃棄物処分計画の推進に大きな役割を果たすことが指摘された。

*** 今後の原産年次大会への教訓**

原産年次大会が、原子力関係者の政策、方針、見解を表明する場として、国内的にも国際的にも重要視され、参加者が増加していることから、こうした考え方が確実に伝達されるよう、一般市民、メディア、教育界等の参加や対話の機会を併せ持つことの必要性。

住民の協力・同意が不可欠な社会的選択の時代に応じて、立地地域にける開催の重要性。

原子力界における若手中堅層の一層の参加と発言の機会を増やすことへの努力の必要性。

以 上

第36回原産年次大会プログラム

基調テーマ：国民の理解を求めて 原子力のさらなる発展のために
 開催日：平成15年4月14日(月)～17日(木)
 場所：敦賀大会 敦賀市民文化センター・大ホール
 福井大会 福井市フェニックスプラザ・大ホール

| テクニカルツアー | 敦賀大会 | 福井大会 | |
|--|---|---|---|
| 4月14日(月) | 4月15日(火) | 4月16日(水) | 4月17日(木) |
| Aコース 日本原電敦賀2号機& 若狭湾エネルギー研究センター と敦賀市内見学 Bコース サイクル機構・もんじゅ と敦賀市内見学 Cコース 関西電力大飯発電所と 若狭地方見学 Dコース 若狭湾エネルギー研究センター と越前地方見学 | 受付開始(8:45～) オープニングセッション (9:30～10:30) 原産会長所信表明 福井県知事挨拶 敦賀市長挨拶 大会準備委員長講演 | 開会セッション (9:00～9:40) 原産会長挨拶 文部科学大臣政務官所感 経済産業大臣政務官所感 科学技術政策担当大臣所感(代読) | セッション3 (9:00～11:30) 「着実に進む世界の高レベル 廃棄物処分計画」 [パネル討論] |
| | 特別講演(午前の部) (10:30～12:00) | 特別講演 (9:40～10:10) | |
| | 昼食(弁当) (12:00～13:30) (きらめきみなと館) | セッション1 (10:10～12:00) 「社会の持続的発展 環境、エネルギー面での挑戦」 [講演] | 昼休み (11:30～13:00) |
| | | 午宴会 (12:20～14:10) (福井ワシントンホテル) | |
| | 原子力広報女性アドバイザーの会主催 「若狭おばちゃん劇場」 (12:45～13:10) | 福井県女性エネの会主催 「紙芝居」 (13:40～14:05) | セッション4 (13:00～15:30) 「身近な原子力を 福井県から考えてみよう」 [パネル討論] |
| | 特別講演(午後の部) (13:30～14:30) | セッション2 (14:30～17:30) 「原子力発電所の運転管理 新たな取り組み」 [パネル討論] | |
| | プレナリーセッション (14:45～17:20) 「プルトニウム利用の意義を 再確認する」 [講演] | | 市民からの質問に答える会 (15:40～17:00) (2階, 小ホール) |
| | レセプション (17:30～19:00) <気比太鼓などの演奏> (きらめきみなと館) | 福井市立藤島中学校への出張講義4月16日(水)14:30～16:00 福井県内中学校教員との懇談会4月16日(水)18:00～20:00 敦賀市物産展 15日(火)11:00～19:30(きらめきみなと館) 福井市物産展 16日(水)・17日(木)11:00～17:00(フェニックスプラザ) | |
| | 市民の意見交換の夕べ (18:00～20:00) (プラザ萬象・小ホール) | | |

第36回原産年次大会 セッションテーマと内容

基調テーマ：国民の理解を求めて 原子力のさらなる発展のために

< 敦 賀 大 会 >

(会場：敦賀市民文化センター・大ホール)

4月15日(火)

【オープニングセッション】9:30～10:30

<議長> 小林 庄一郎 (社)日本原子力産業会議副会長

原産会長所信表明

西澤 潤一 (社)日本原子力産業会議会長

福井県知事挨拶

栗田 幸雄 福井県知事

敦賀市長挨拶

河瀬 一治 敦賀市長

大会準備委員長講演

児嶋 眞平 福井大学学長

【特別講演(午前の部)】10:30～12:00

<議長> 都甲 泰正 核燃料サイクル開発機構理事長

「我が国の核燃料サイクル政策」

藤家 洋一 原子力委員会委員長

「原子力の平和利用に果たすIAEAの役割」

V・ムロゴフ 国際原子力機関(IAEA)事務次長

「原子力発電の将来展開」

A・ローベルジョン アレバ経営取締役会会長、仏COGEMA社会長兼社長

<昼休み> 12:00～13:30

(12:45-13:10 関西原子力懇談会原子力広報女性アドバイザー主催「若狭おばちゃん劇場」)

【特別講演(午後の部)】13:30～14:30

<議長> 鷲見 禎彦 日本原子力発電(株)社長

「台湾の原子力発電開発 その実績と展望」

欧陽 敏盛 中華核能学会会長

(代読)邱 賜 聰 元中華核能学会理事

「高速増殖原型炉『もんじゅ』に係る高裁判決について」

薦田 康久 経済産業省原子力安全・保安院審議官(核燃料サイクル担当)

【プレナリーセッション】１４：４５～１７：２０

「プルトニウム利用の意義を再確認する」〔講演〕

わが国は、ウラン資源有効利用の観点から核燃料リサイクルを原子力政策の根幹に据えてきたが、リサイクルにより得られるプルトニウム資源については、海外で多くの実績がある軽水炉でのMOX燃料利用でさえも、社会的要因等により当面の実施に見通しが立っていない。こうした状況で、原子力関係者は核燃料リサイクル政策の実現に向け、あらためてその意義を確認したうえで、国民理解を得ることが重要となっている。

このセッションでは、敦賀地域に立地するプルトニウム利用施設(「もんじゅ」「ふげん」)を取り上げ、その開発意義や役割を再確認する。とともに、核燃料リサイクルにおける世界的な主流となっているプルサーマルや、解体核兵器からの余剰プルトニウムの有効利用について国内外の取組みを紹介しながら、わが国が掲げるプルトニウム本格利用の意義について、エネルギー資源論、技術開発論などの観点から、あらためて検証する。

<議長> 三宅 正宣 福井工業大学学長

「エネルギー資源論からみたプルトニウム利用の意義」

内山 洋司 筑波大学機能工学系教授

「『ふげん』から『もんじゅ』へ」

中神 靖雄 核燃料サイクル開発機構副理事長

「米国の第４世代・先進的燃料サイクルイニシアチブ」

W．マグウッド 米国エネルギー省(DOE)原子力エネルギー科学技術局長

(代読) S．ジョンソン 同省原子力エネルギー科学技術局次長

「フランスのプルトニウム民生利用戦略」

J．ブシャール フランス原子力庁(CEA)原子力開発局長

「ロシアの燃料サイクルと核解体余剰プルトニウム処分」

V．コロトケビッチ ロシア原子力省(MINATOM)核燃料サイクル局長

【レセプション】１７：３０～１９：００

(会場：きらめきみなと館)

【市民の意見交換の夕べ】１８：００～２０：００

(会場：プラザ萬象・小ホール)

本大会を一層開かれたものとするため、原子力関係者に加え一般市民の方々にも積極的な参加を呼びかけ、市民の意見交換の場を設ける。とくに今回は、「もんじゅ」をめぐる動きや一連の原子力発電所での不正記録問題の影響を踏まえたうえで、地元地域の参加者を交え、わが国の原子力が抱える課題をめぐり、市民の視点から幅広く率直な意見を交わすこととする。

〔司会〕五十嵐 智恵 フリーアナウンサー

〔コーディネーター〕

森 一久 (社)日本原子力産業会議副会長

〔コメンテーター〕

青山 喬 滋賀医科大学名誉教授

坂本 美千代 敦賀女性エネの会会員

中島 篤之助 元中央大学教授

橋詰 武宏 福井新聞論説委員長 ほか大会関係者

< 福 井 大 会 >

(会場：福井市フェニックスプラザ・大ホール)

4月16日(水)

【開会セッション】9：00～9：40

| | |
|--------------|--------------------|
| <議長> 新木 富士雄 | 北陸電力(株)社長 |
| 原産会長挨拶 | |
| 西澤 潤一 | (社)日本原子力産業会議会長 |
| 文部科学大臣政務官所感 | |
| 大野 松茂 | 文部科学大臣政務官 |
| 経済産業大臣政務官所感 | |
| 西川 公也 | 経済産業大臣政務官 |
| 科学技術政策担当大臣所感 | |
| 細田 博之 | 科学技術政策担当大臣 |
| (代読)大熊 健司 | 内閣府政策統括官(科学技術政策担当) |

【特別講演】9：40～10：10

「原子力施設の安全確保に求められるもの」
松浦 祥次郎 原子力安全委員会委員長

【セッション1】10：10～12：00

「社会の持続的発展 環境、エネルギー面での挑戦」〔講演〕

今後、アジア地域を中心とした急激な人口増加が進み2050年には世界全体のエネルギー消費量が倍増すると予想される中で、地球規模での環境悪化や天然資源をめぐる国家間の競争など、人類社会に対する大きな脅威の発生が懸念されている。こうした事態を回避し持続可能な社会開発を実現するために、世界は人類社会の長期展望を描いたうえで、協調的な行動を実践していく必要がある。

このセッションでは、社会が持続可能な発展の実現を図るうえで主要な座標軸となる地球温暖化防止とエネルギー問題を視点として、国や産業界が今後取り組むべき方策を探るとともに原子力の役割について改めて確認する。

また、エネルギー・電力を大量消費している大都市圏の消費者の観点から、環境保全、エネルギーの節約など国民一人一人が考えるべきことについても議論する。

<議長> 秋元 勇巳 三菱マテリアル(株)会長

「わが国のエネルギー安全保障と環境保全」

甘利 明 衆議院議員、自由民主党エネルギー・総合政策小委員会委員長

「社会の持続的発展に電気事業が果たすべき使命」

藤 洋作 電気事業連合会会長

「中国のエネルギー戦略と環境対策における原子力の役割」

馬 鴻 琳 中国国家原子能機構秘書長

「環境問題を消費者の立場から考える」

井上 チイ子 生活情報評論家

【午餐会】12:20～14:10

(会場：福井ワシントンホテル「天山の間」)

<司会> 西澤 潤一 (社)日本原子力産業会議会長

〔会食〕

〔特別講演〕

「二つの平和について 日本の文化と構造改革」

山折 哲雄

国際日本文化研究センター所長

<昼休み> 12:00～14:30

(13:40-14:05 福井県女性エネの会主催「紙芝居」 福井フェニックスプラザ・大ホール)

【セッション2】14:30～17:30

「原子力発電所の運転管理 新たな取組み」〔パネル討論〕

わが国で50基以上が稼働中の原子力発電所における安全確保や規制は、機器・設備などの健全性確保に主眼を置いて実施されてきているが、今後は、原子力発電の運転管理システム全体を重視した安全確保が必要と認識されてきている。こうした安全確保の仕組みが十分に機能し、原子力発電所が安全運転の実績を重ねることで立地地域および国民からの信頼を得られ、さらには効率的運転の実現につながることも重要である。

このセッションでは、今後高経年化時代を迎える原子力発電が安定的で効率的な稼働を実現する上で必要となる条件を、良好な実績を維持している米国や韓国の事例を参考にしながら、わが国の原子力発電運営体制の透明性やその説明責任、合理的・科学的な安全規制、官（推進、規制）と民（事業者）の健全な関係、運転保守作業のあり方など、様々な角度から捉え議論する。

<議長> 近藤 駿介 東京大学大学院工学系研究科教授

〔基調講演〕

「国民の期待に応える原子力発電所の運転管理のあり方」

近藤 駿介

(同上)

〔パネリスト〕

金 顕 君

韓国原子力安全技術院(KINS)安全評価部長

M. コミスキー

米国原子力エネルギー協会(NEI)渉外担当上席理事

佐々木宜彦

経済産業省原子力安全・保安院長

飛田恵理子

東京都地域婦人団体連盟生活環境部副部長

松村 洋

関西電力(株)取締役原子力事業本部副事業本部長

4月17日(木)

【セッション3】9:00～11:30

「着実に進む世界の高レベル廃棄物処分計画」〔パネル討論〕

平成12年に高レベル廃棄物処分法が制定されたわが国では、現在、処分実施主体である原子力発電環境整備機構が取組みを進めており、平成14年12月には概要調査地区の公募を開始した。海外では、昨年7月に世界最大の原子力発電国の米国においてヤッカマウンテンが最終処分場として承認されるという大きな動きが見られたほか、フランスでは地下研究施設の建設が進行中であり、フィンランドでも地層処分研究施設の建設が今年中に開始される計画である。

このセッションでは、わが国においても計画が具体的に動き始めた高レベル廃棄物処分をめぐる、海外諸国での処分場建設までの道筋をレビューしながら、概要調査地区の選定が国民合意を得つつ着実に進められるためには何が課題なのか、海外で採用された選定プロセスから学ぶべきものは何か、などを探る。

<議長> 中村 政雄 科学ジャーナリスト

〔基調講演〕

「世界の高レベル放射性廃棄物処分計画 国際的観点で得られた教訓」

Y. ルバルス 仏放射性廃棄物管理庁 (ANDRA) 会長

「日本における高レベル放射性廃棄物処分への取り組み」

外門 一直 原子力発電環境整備機構理事長

〔パネリスト〕

T. エイカス フィンランド POSIVA 社技術担当本部長

T. カールション スウェーデン 前オスカーシャム市長

竹内 舜哉 原子力発電環境整備機構理事

A. リーシング 欧州原子力学会 (ENS) 副会長

Y. ルバルス 前出

<昼休み> 11:30～13:00

【セッション4】13:00～15:30

「身近な原子力を福井県から考えてみよう」〔パネル討論〕

今大会が開催される福井県には、若狭湾地域に軽水炉原子力発電所13基のほか、新型転換炉「ふげん」、高速増殖炉原型炉「もんじゅ」、若狭湾エネルギー研究センターなどが立地し、わが国における「原子力センター」ともいうべき役割を果たしている。原子力はエネルギー面での利用の他に、ラジオアイソトープ、放射線を利用した様々な技術が、人間社会の身近なところで役立っている。

このセッションでは、原子力技術を用いたベンチャービジネス、放射線の医学利用、原子力の教育問題、など一般の市民とのかかわりを改めて紹介して、今後、これらをどのように地域や社会全般の理解に役立て、発展させていくかについて意見交換を行う。

<議長> 神田 啓治 エネルギー政策研究所所長、京都大学名誉教授

〔パネリスト〕

| | |
|--------|----------------------------|
| 天野 寿美恵 | 福井県女性エネの会理事 |
| 菊池 三郎 | 核燃料サイクル開発機構理事 |
| 木村 逸郎 | (株)原子力安全システム研究所 技術システム研究所長 |
| 中川 英之 | 福井大学工学部長 |
| 橋詰 武宏 | 福井新聞論説委員長 |
| 平尾 泰男 | 放射線医学総合研究所顧問 |
| 町田 明 | (財)若狭湾エネルギー研究センター専務理事 |

【市民からの質問に答える会】 15：40～17：00

（会場：福井市フェニックスプラザ・小ホール）

この「市民からの質問に答える会」では、一般市民の参加者を対象に、敦賀大会および福井大会を通じ、各セッションで発表された講演や討論の内容についての質問や疑問に答え、さらに知識を深めてもらうとともに、今後の原子力開発利用全般についても、提案など出してもらい、意見を交換する機会とする。

| | |
|------------|-----------------|
| 〔司会〕石山 素子 | フリーアナウンサー |
| 〔コーディネーター〕 | |
| 森 一久 | (社)日本原子力産業会議副会長 |

〔コメンテーター〕

| | |
|---------|-------------------|
| 中島 篤之助 | 元中央大学教授 |
| 橋詰 武宏 | 福井新聞論説委員長 |
| A．リーシング | 欧州原子力学会（E N S）副会長 |
| 山田 寿子 | 福井県女性エネの会理事 |
| ほか大会関係者 | |

以 上

第36回原産年次大会参加者数

参加者数：

日本を含む17カ国・地域、6国際機関
国内1,239名、海外97名

合計1,336名

内 訳：

17カ国・地域

日本、韓国、米国、フランス、英国、ロシア、オーストラリア、南アフリカ、中国、リトアニア、ブラジル、スイス、フィンランド、スウェーデン、インド、オーストリア、台湾

7国際機関

欧州原子力学会(ENS)、国際原子力機関(IAEA)、国際原子力学会連合(ISTC)、世界原子力発電事業者協会(WANO)、フォーラトム(FORATOM)、世界原子力協会(WNA)

(参 考)

4月15日(火) 市民の意見交換の夕べ 約250名

4月17日(木) 市民からの質問に答える会 約180名